慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コロナ禍における対人関係の変化 : インタビュー調査にもとづく社会学的考察
Sub Title	The changes to human relationships during the corona disaster : a sociological study based on interviews
Author	小田中, 悠(Odanaka, Yu) 牛膓, 政孝(Gocho, Masataka)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2023
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.94 (2023.) ,p.[33]- 51
JaLC DOI	
Abstract	During the COVID-19 pandemic, there was much discussion that measures of infectious diseases influence human relationships. For example, over the issue of restrictions on outings (e.g., "Stay Home"), someone mentioned that it leads to the separation of human relationships. Meanwhile, another person found it strengthened members' relationships because of the increased frequency of face-to-face meetings between family members at "Stay Home," solidarity buildings in an emergency like disaster utopia, etc. This paper, based on an interview survey, considers the mechanism by which people experience a change in their human relationships. We discuss the following three perspectives, which describe people's "separation" and "connection"; the transformation of practice on time-space of life (Giddens), one person's decision (e.g., no mask) operating as another person's (in this case, infection's) risk (Luhmann) and the attitude of risk-based on actor's value (Lash). The interviews were conducted from June to September 2021 and included seven participants. From each of these perspectives, we analyzed the transition of seven participants ' human relationships. As a result of the analysis, we reveal that to express their 'separation' and 'connection,' in addition to the above three perspectives, the notion of empathy is needed. This notion and the above perspectives complement each other. This result indicates that the experience in a particular situation of the Corona disaster can be included in a more abstract theoretical framework. That is, there is a possible connection between the argument of helping each other through empathy and the social theory of risk.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000094-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コロナ禍における対人関係の変化：インタビュー調査にもとづく社会学的考察

The Changes to Human Relationships During the Corona Disaster: A Sociological Study Based on Interviews

小田中　悠*・牛膓政孝**

Yu Odanaka and Masataka Gocho

During the COVID-19 pandemic, there was much discussion that measures of infectious diseases influence human relationships. For example, over the issue of restrictions on outings (e.g., "Stay Home"), someone mentioned that it leads to the separation of human relationships. Meanwhile, another person found it strengthened members' relationships because of the increased frequency of face-to-face meetings between family members at "Stay Home," solidarity buildings in an emergency like disaster utopia, etc. This paper, based on an interview survey, considers the mechanism by which people experience a change in their human relationships. We discuss the following three perspectives, which describe people's "separation" and "connection"; the transformation of practice on time-space of life (Giddens), one person's decision (e.g., no mask) operating as another person's (in this case, infection's) risk (Luhmann) and the attitude of risk-based on actor's value (Lash). The interviews were conducted from June to September 2021 and included seven participants. From each of these perspectives, we analyzed the transition of seven participants ' human relationships. As a result of the analysis, we reveal that to express their 'separation' and 'connection,' in addition to the above three perspectives, the notion of empathy is needed. This notion and the above perspectives complement each other. This result indicates that the experience in a particular situation of the Corona disaster can be included in a more abstract theoretical framework. That is, there is a possible connection between the argument of helping each other through empathy and the social theory of risk.

Key words : corona disaster, human relationship, time-space of life, risk, disaster utopia

キーワード：コロナ禍，人間関係，生活時間・空間，リスク，災害ユートピア

1．はじめに

2020 年初頭に新型コロナウイルス感染症の流行が始まってから，新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づく緊急事態宣言の発出やまん延防止重点措置の適用がたびたびなされてきた。それに伴い，

* 東京大学大学院情報学環助教，慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程（2016～2020 年）

** 中京大学企業研究所特任研究員，慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程（2015～2021 年）

飲食店等に対する休業や営業時間の短縮，そして，「三密」の回避や「ステイホーム」という標語の下で，不要不急の外出の自粛が要請された[1)]。とりわけ，最初の緊急事態宣言が発出されていた期間（東京都では，2020 年 4 月 7 日～5 月 25 日）においては，さまざまな業種が休業を決定し，多くの人々が外出を控えた。それにより，たとえば，宣言発出後初の日曜にあたる 4 月 12 日の渋谷駅周辺の人出は，2019 年 11 月の休日平均と比べて，73.7％減少したという（朝日新聞 2020a）。

本稿では，コロナ禍と呼ばれる状況において，このような感染拡大防止対策が対人関係に与えた影響に注目する[2)]。コロナ禍における対人関係の変化については，既に調査・研究が蓄積されつつある。一方で，外出の自粛を求められたことにより，他者と接触する機会が減少したことが指摘されている。たとえば，内閣府が行った質問紙調査の結果によれば，コロナ禍において，人と直接会ってコミュニケーションをとることが減ったと答えた人はおよそ 70％，そして，家族以外の親しい人との関係や地域・社会とのつながりの減少を感じている人がおよそ 30％いるという（内閣府 2022）。

他方で，コロナ禍において，特定の他者との接触頻度が増加したという指摘もある。たとえば，「ステイホーム」によって，自宅で過ごす時間が増加したことは，同居する家族との身体・物理的な接触の増加をもたらした。永田夏来は，いくつかの調査結果をレビューしながら，そうした状況にあっては，家族の関係が良好なものとなりうるし，性別役割分業形態が変化していく兆しもあると述べている（永田 2021）。しかし，ともに過ごす時間が増えたことは，そのようなポジティブな変化を惹起しうる一方で，DV の増加や，価値観の違いの顕在化による離婚の検討（「コロナ離婚」）というネガティブな変化をもたらすことも報告されている（Lip pop 2020; 内閣府 2021）。

また，このような接触頻度の増減という論点に加えて，人々のあいだに醸成されうる，ポジティブなつながりの意識にも注目が集まっている。コロナ禍においても，「災害ユートピア」と呼ばれる，助け合いの意識が芽生え，利他的なふるまいが生じている状態が多く観察されたという（Solnit 2009=2010, 2020=2020）。たとえば，多くの困難を引き受けた医療関係者へ寄付や激励が寄せられたことはその一例であろう（日本医師会 2021）．また，このような一体感がコロナ禍という危機を乗り越える力を与えるのか否かも検討され始めている（有馬 2021）。

以上のように，コロナ禍における対人関係に関する調査・研究は，感染症対策が強いられる中で，人々のあいだの接触頻度の増減とその影響，あるいは，災害時に特有とされる，他者への思いやりの態度といった観点から，対人関係の変化を捉えようとしてきたといえる。そして，内閣府による調査を参照してきたように，とりわけネガティブな変化は国や自治体が抱える課題として論じられている。

では，そのように社会全体の関心事として語られる，コロナ禍における変化は，個々人の暮らしの中で，いかに経験されてきたのだろうか。そのような問題意識の下で，人々それぞれの「小さな歴史」がいかに生きられてきたのかを知ることは，コロナ禍での生活を描く上で欠かせないものであろう（飯島 2020）。しかしながら，そのような側面に注目した研究は限定的なものにとどまっている（三浦ほか 2021）。

そこで，本稿では，インタビュー調査によって得られた語りをもとに，コロナ禍にあって，対人関係が変化していくメカニズムを考察する。2 節では，先行研究として三浦麻子らによってなされた，感染経験者や医療従事者を対象とする，コロナ禍での生活についてのインタビュー調査を検討する（三浦ほか 2021）。それによって，三浦らとは異なる対象へ目を向けること，そして，さまざまな領域の研究者が取り上げるコロナ禍での生活という対象を社会学の議論と関連づけていくという展開可能性が示さ

れる。

それを受けて，本稿の課題を，感染を診断されておらず，医療従事者でもない人々の「小さな歴史」を積み上げ，社会学的な議論の俎上に載せていくための橋頭堡を築くことと設定する。そのために，本稿が採る方針は，対象となる対人関係の変化を，既存の社会学理論と関連づけうる分析視角から論じていくことである。なぜなら，そうすることによって，コロナ禍における経験という特殊な，そして，さまざまな領域で研究が進められている事例を，これまでの，そして，これからの社会学における議論に位置付けられるからである。

そこで，3 節では，M. フーコーに依拠しながら，日本においてなされた感染症対策の要点を整理した上で，それが対人関係に影響を与えるメカニズムを捉えるための視角を，A. ギデンズ，N. ルーマン，そして，S. ラッシュらのリスク論と関連づけながら提示していく。具体的には，政府のとる感染症対策に代表される，専門家の知識を前提とした，生活時間・空間の変化，感染させられる可能性が高い場面の忌避，そして，リスクへの社会的な対応と，時にそこから逸脱しうるような諸個人の態度といった論点が導かれる。

続いて，インタビュー調査から得られた語りを，上述した視角から分析していく。4 節において述べる通り，調査は 2021 年 6 月から 9 月にかけて行われ，7 名の協力者からコロナ禍における生活の変化についての語りを得た。そして，5 節では，調査協力者たちの身体・物理的な接触の変化に関する経験を整理していく。6 節においては，他者への心的な態度の変化に関する経験のうち，とりわけ，災害ユートピア的な利他的なふるまいに焦点を合わせる。その際，そうしたふるまいと関連すると指摘されているものの 1 つである，共感と呼ばれる態度にも注目しながら，本稿の視角に沿って分析を進めていく（大門・渥美 2016; McCaffree 2020）。

2. 先行研究と本稿の課題

ここでは，コロナ禍における対人関係の変化に言及している，「小さな歴史」を明らかにしようとした調査として，三浦麻子，村上靖彦，平井啓による調査を検討していく。三浦らの調査は，2020 年 7 月から 11 月にかけて行われ，個々人がコロナ禍と関わる立場によって「異なる景色」を見ていることが示された。そこでは，感染経験者 5 名と感染症に関わる医療従事者 16 名のインタビュー記録が公開されている（三浦ほか 2021）。また，その結果から得られた，対人関係の変化に関する知見は，人と人との分断としてまとめられている（三浦 2021）。

分断とみなされている事例には，次のような調査協力者たちの経験がある。すなわち，感染した家族の最期を看取ることができない，感染した母親が隔離を余儀なくされ，子どもと接することができない，入院患者や高齢者施設入居者への面会の制限，そして，医療関係者らが十分な対話を行うことなくケアを行わざるを得ないといった経験である（三浦 2021; 村上 2021: 5 章）。

では，このような知見を踏まえた時，「小さな歴史」を記録し，「異なる景色」を描いていくという研究には，どういった展開可能性があるだろうか。第 1 に，調査対象者という観点から，三浦らの関心を押し広げていく可能性がある。三浦らの調査は，コロナ禍でとりわけ大きな負担を強いられた人たちの「小さな歴史」の記録として重要なものである。しかし，調査対象が限定されているがゆえに，自身の隔離経験や，そういった患者たちを目の当たりにしてきた医療従事者たちの経験といった，他者との関係の負の変化が強調され，冒頭で述べたような，対人関係，とりわけ，家族関係について，前向きな経

験をしてきた人々の姿が描かれてはいない。したがって，三浦らとは異なるカテゴリーの人々を対象にすることで，より立体的な「異なる景色」を見出すことができるだろう。

第 2 に，コロナ禍という特定の時期の経験を，平時や他の災害時における経験と照らし合わせて検討するために，社会学において広く知られている理論的な枠組みと関連づけていくという方針がある。三浦らの研究は，コロナ禍という特定の時期における経験を重視し，それを記述することに重きをおいている。そのため，それは貴重な資料となっている一方で，コロナ禍以外の時期における経験との異同を社会学的に考察するために必要となるであろう，感染症の流行が対人関係の変化へ影響を与える機序は論じられていない。

以上を踏まえ，本稿では，次のようにして，コロナ禍にある人々の対人関係を捉えることを目指す。すなわち，本稿の目的は、新型コロナウイルスへの感染を診断されておらず，かつ，非医療従事者である人々の感染拡大防止対策下での経験を，社会学における理論枠組みと関連づけながら考察することである。なお，ここで注目する社会学的な議論には，たとえば，リスク論がある。コロナ禍は，既存のリスク論の枠組みによって捉えうる現象であることが指摘されている（早川 2021; 牛膓・小田中 2022）[3]。リスク論には，あるリスクの下で，人々の関係がネガティブに変化することへの指摘がある一方で，U. ベックやルーマンが述べているように，不安を媒介にして人々のあいだに結びつきが生まれるという視点も存在している（Beck 1986; Luhmann1996; 三上 2014）。それゆえ，コロナ禍における感染リスクの下で生じうる対人関係の変化は，代表的なリスク論の議論と結びつけて捉えられると考えられる。

3. コロナ禍の対人関係の変化を捉える視点

3.1. 感染症対策の整理：フーコーの視点から

本節では，感染症対策を強いられた生活における，対人関係のあり方を分析するための枠組みを示していく。そのために，まず，日本における感染症対策について，フーコーの視点から 2 つの類型に整理する（Foucault 2004=2007; 美馬 2020; 佐幸 2021; 西迫 2021）。

第 1 に，外出等の行動制限やマスク着用といった，人々の個々の身体に直接働きかける管理がある。フーコーは，そのような対策の例として，ペストの感染防止対策を挙げているが，そこでは，外出可能な時間帯や接触のしかたなどが統制されていたという。コロナ禍においては，「ステイホーム」という標語の下でなされた外出制限や，マスク着用，「三密の回避」や「ソーシャル・ディスタンス」[4] といった対策が該当する。

第 2 に，高リスク群の措定やワクチン接種の推進に代表される，人口単位での管理が挙げられる。フーコーは，個々の身体ではなく，人口単位での感染者数・死亡者数のコントールがあることも指摘している。そのような感染症対策は，まず，たとえば，年齢層ごとの死亡率や罹患率を数量的なリスクとして算出する（Foucault 2004=2007: 75）。そして，人口学的，地理的なカテゴリーからリスク群とされた集団に対する介入を行うことで，人口全体を正常な状態に近づけるように試みていく（Foucault 2004=2007: 77; Castel 1991; 重田 2003）。コロナ禍においても，年齢や地域などに着目しながら，罹患率や重症化・死亡率の高い群が見出され，それらを対象とした対策がなされてきた。典型的なものは，重症化・死亡率が高い高齢者に対する，優先的なワクチンの接種であろう（東京都 2021）。また，感染率が高いとしてなされた「夜の街」への警鐘や，東京都に代表される感染拡大地域へ／からの移動の自粛要請といった対策は，上述した身体的な移動の制限とも絡み合いながらなされたものだといえるだろう

（朝日新聞 2020b）。

では，このような対策，すなわち，移動の制限を主とする身体的な統制，そして，感染拡大や死者数の増加に影響を与えうるリスク群の管理は，人々の他者とのかかわり方にどのような変化を生むのだろうか。以下では，次の3点に注目していく。すなわち，第1に，移動制限から導かれうること，第2に，リスク群の措定から想定されること，そして，第3に，そもそものリスクに向き合う態度に注目し，それらを捉えるための視座を，社会学の理論と関連づけながら示していく。

3.2. 感染症対策が対人関係に与える影響

上述した感染症対策がなされる社会における人々の暮らしは，政府や自治体が示す対策方針に大きく影響を受けることになる。たとえば，規律訓練的な移動制限によって，冒頭で述べたような，他者との接触機会の増減が生じるであろう。また，高リスク群の措定は，自分や重要な他者への感染を回避するようなふるまいへとつながっていくと考えられる。

そのような状況において生じうることを考える際に手がかりになるのが，ギデンズのリスク論である。ギデンズの議論は，リスク下での人々のふるまいを論じる際に，専門家による知識を参照しながら，再帰的に生活を立て直そうとする様子を捉えている（Giddens 1991=2005; 牛膓・小田中 2022）。

このような，専門家の知識に依拠しながら行われる，リスク下での行動の変容の中には，先に見たように，移動制限に伴う他者との接触の増減や高リスク群との関わりを忌避するといったしかたで，他者との関係の変化につながるものがある。そして，それらの変化は，さらに以下で示すように社会学上の議論と関連させることができる。

まず，移動制限に伴う他者との接触の増減について考えていこう。コロナ禍における移動の制限は，職場や学校といった場所で会う人々との接触を減らす一方で，「ステイホーム」によって，同居する家族との接触は増加していく。このような様子は，フーコーの規律訓練論や時間地理学を参照しながら展開されている，ギデンズの生活時間・空間の議論と関連づけることができる（Giddens 1984=2015: 3章）。ギデンズは，学校の時間割のように，人々の生活時間・空間，つまり，いつどこでどれだけの時を過ごすのかは，1日，1週間といった単位で習慣化されていると述べている。

このことは，人々がいつどこで誰と出会う／出会わないかについての習慣も有していることも意味している。すなわち，ある人の習慣と他の人との習慣が同期する時間，場所において，両者は出会うこととなる。そのような習慣は，進学や就職，結婚，出産などのライフイベントによって変化するものでもあるが，コロナ禍においては，そのような生活時間・空間に関する習慣が一斉に変化した（Giddens 1984=2015: 3章; Pavel et al. 2020）。それによって，同期していたはずの者たちが突然非同期化を余儀なくされてしまう，あるいは逆に，同期しないはずだった者たちの同期が成立し，接触する頻度が上がったと考えられる。

次に，同じく専門家によってなされる，高リスク群の措定という対策が対人関係に与える影響を考えていこう。そのように生じる変化としては，たとえば，「若者」，「夜の街」，あるいは，「東京」のように，人口学的、地理的に高リスク群とされた人たちとの接触を避けるようになるというものが想定できる。

この論点と重なるところがあるのは，ルーマンのリスク論である。ルーマンは，リスクについて論じる際に，リスクと危険という区別，そして，それと対応する，決定者と被影響者という区別を導入している。すなわち，未来において損害が生じうると想定されるとき，ある人の決定がその損害が生じるか

否かに関わっていれば，その人＝決定者にとってそれはリスクであり，そのようにリスクを負う者の決定によって，自らの決定とは無関係に損害を被りうる者＝被影響者にとって，それは危険だという（Luhmann 1991=2014: 2 章，6 章）。

このことは，ある者が自身の決定に帰属するものと見なしている未来の損害＝リスクは，他のある者にとっては自分ではコントロールできない損害＝危険と見なされることを意味している（Luhmann 1991=2014: 130）。それゆえに，決定者と被影響者は分離してしまう可能性があるという（Luhmann 1991=2014: 6 章; 小松 2003: 56）。そのような立場の不一致は，手を取り合って将来の損害に対処しようという態度ではなく，決定者と被影響者のあいだに溝を生むことになるのである。

このような議論を踏まえれば，高リスク群が人口学的，地理的に措定されることの対人関係へ影響は，感染という脅威に対して，受け身とならざるを得ない人々と，感染している／させる可能性の高い人々とのあいだでコンフリクトが生じる可能性があるいうことができる。ただし，ここで高リスク群とされる人々の中には，ルーマンが述べるように自らの決定によってリスクを負っている者もあれば，コロナ禍以前から東京都に居住していた場合のように，本人の決定にかかわらず，高リスク群に割り当てられてしまった者もあるだろう。

さて，ここまでの議論は，専門家の知識を信頼し，感染症対策に従う中で生じた変化に焦点を合わせたものであった。しかし，それに対して，フーコーが「反操行」という言葉で捉えているように，たとえば，ワクチンの接種を拒否するような態度に注目することもできる（Foucault 2004=2007; 西迫 2021）。このような態度の問題は，フーコーにおいては，「生存の美学」といった術語の下で展開されているが，N. ローズは，人々の日々のふるまいに関する「強制，禁止，判断の，より日常的で実践的な手順，体系，形態」に注目している（Foucault 1984=1986; Rose [1989] 1999=2016: 23）。その上で，ローズは，心理学や遺伝学といった科学的な知識に対する個々人の態度のありようを捉えようとしている（Rose [1989] 1999=2016, 2007=2014）。

コロナ禍というリスク下におけるそういった態度の異同は，たとえば，ワクチンの接種や路上飲酒の自粛といった感染拡大防止対策への態度の異同として現れている。そして，そのような異同は，自らとは態度の異なる者を避け，同じ者とは関わりを深くしていくという変化をもたらすと考えられるだろう。

このような事態は，ラッシュのリスク論と関係づけていくことができる。ラッシュのリスク論は，ベックおよび，とりわけ，ギデンズによって展開されたそれに対する批判として展開されたものである（Lash 2000）。上述のように，ギデンズの議論においては，人々はリスクある状況において専門家知識への参照を行うことで，リスクによる不安を再安定化・再秩序化を図るとされる。ラッシュは，このようなリスク論は，規範的に秩序化され，垂直的に構造化され，個人にベースをもっているという。

それに対して，ラッシュは自らのリスク論を，価値に基づき脱秩序化され，水平的に脱構造化され，コミュナルなベースをもつものとして規定する[5)]。すなわち，専門家システムによるリスク計算の所産を受けとめた上で，各個人が――時に「反操行」的に――行為や判断を再帰的に行い，リスクに対する態度決定をなしうる局面に焦点が合わせられる。そして，その際の行為や判断，態度決定の基準となるのが，主観的でありかつ文化的な生活形式に根差した「価値」である。

ここでの「価値」とは一方で，「功利主義的な利害関心であるよりは，善き生活を育むこと」を目的とした「私的で，個人的で，主観的な」価値である（Lash 2000: 47）。行為者は，経済上の損得や利害

関心にとどまらず，各人の生活において独自に望まれる価値を追求する主体，ライフコース上における「望ましさ」という基準で行為や判断を行なう主体として捉えられる。他方で，「価値」は，ある程度の集合性を持つもつもので，「第一に私的領域，とりわけ家族のなかにある……私的な道徳性，言語，宗教，死や誕生，結婚，戦争，子育てを含む生活形式といったものの中心的価値」であるとされている（Lash 2000: 60）。

さらに，この「価値」は，それを共有する度合いによって自他の共同性の境界を形づくる（Lash 1994=1997: 269, 2000: 60）。たとえば，コロナ禍においても路上飲酒，ワクチン接種を遂行するか否かなどがリスクをめぐって争点となっていた――すなわち，専門家知識の規範的秩序化，垂直的構造化が十全に機能しないような場面の――ように，ある行為や出来事が，ある人にとっては避けるべきリスクであるのに対して，他の人にとっては十分にリスクあるものとして見なされていないような場面がある。このような場面における個々の態度決定は，当の行為や出来事が，自身の生活において「望ましい」ものであるとする場合，行為者はそれによるリスクを積極的に引き受けたり，「望ましくない」場合には，時として嫌悪の対象として避けたりするといった「価値」の観点で把握される。当然のことながら，そのような，人々のあいだでの「価値」の異なりや類似は，人間関係の心理的な距離感にも影響する。

また，諸個人において抱かれている「価値」は，再帰的に変容を被る対象でもある。それゆえに，親しい間柄の人々の間でも，新たに遭遇する出来事によって「価値」は再帰的な問い直しの対象として変容しうる。そして，そのことがコンフリクトを発生させることもまた想定される。ここで想起されるのは，コロナ禍においてしばしば指摘されてきた家族という共同体の危機であろう。

ここまで，コロナ禍における対人関係の変化を捉えうる，3つの視点を検討してきた。すなわち，専門家の知識に依拠して行われる感染症対策を信頼し，それを踏まえてなされる，移動の習慣の変化，高リスク群との関わりの拒否，および，感染症対策そのものへ抱く「価値」の異同という観点である。そして，それらはそれぞれ，ギデンズ，ルーマン，ラッシュの議論と関係づけることができた。このことは，これらの観点から「小さな歴史」の分析を行うことによって，コロナ禍における対人関係の変化に関する知見を，社会学的な研究と接続可能なしかたで示せることを意味している。

以下では，このような観点から，インタビュー調査から得られた語りを分析し，それぞれの観点から，他者との関係が変化するメカニズムを描いていく。その際，まず，身体／物理的な接触頻度の変化に関する経験に焦点を合わせ（5節），ついで，心的な態度の変化に関する経験，とりわけ，災害ユートピア的な思いやりの醸成について検討する（6節）。

4. 調査概要

インタビュー調査は，2021年6月から9月にかけて，学術・教育的な目的でのデータ使用の承諾を得た，7名の協力者に対して行われた[6)]。インタビューは各協力者に1度ずつ行った。調査時における協力者の方々の基本的な情報は表1の通りである。

協力者の選定は，コロナ禍の生活や態度に影響するであろう，次の諸点を考慮して行った。まず，共通点としては，感染拡大の中心であった首都圏在住であること，および，感染症対策の影響を受けやすいと思われる，就職・転職，結婚・出産といったライフイベントが起こりやすいであろう20代から30代であることを条件とした。そして，性別はほぼ均等となるようにし（男性4名，女性3名），職業・業種と世帯構成には多様性が出るように配慮した[7)]。なお，Eさんのパートナーと F さんはコロナ禍の最

表 1. 協力者の基本的な情報（調査時）

名前	性別	年齢	居住地	職業・業種	世帯構成
Aさん	男	30代前半	千葉県	小売業	パートナーと同居
Bさん	男	30代前半	東京都	飲食業	単身
Cさん	女	20代前半	神奈川県	専門学校生、小売業	父、母、兄、祖母と同居
Dさん	女	30代前半	東京都	不動産業	父、母と同居
Eさん	男	30代後半	東京都	出版業	パートナー、子ども2人と同居
Fさん	女	30代前半	千葉県	コンサル業（育休中）	パートナー、子ども1人と同居
Gさん	男	20代後半	東京都	芸人	単身

中に出産を経験しており，A さんは調査時にパートナーの出産を控えていた。

調査は，ビデオ通話サービスを用いて，筆者ら 2 名と協力者 1 名の 3 名で，60～90 分程度行われた。インタビューは，2020 年初頭から調査時までのことを振り返りつつ，自らの経験を語ってもらうという方法で進めた。その際，協力者が過去の出来事を想起しやすくなるよう，コロナ禍での主な出来事やその時々の街の様子を掲載したスライドを用意し，それをともに見ながら聞き取りを進めた。

5. 身体／物理的接触頻度の変化に関する経験

5.1. 生活時間・空間の再編による変化

ここでは，生活時間・空間の再編がもたらした，接触頻度の変化について見ていく。まず，「ステイホーム」によって，コロナ禍でなければあったであろう，他者との生活時間・空間の同期を経験できなくなったケースを取り上げる。E さんは，2020 年 3 月に転職を経験し，その直後から調査日に至るまで，テレワークが中心となり，ほとんど出社することはなかった。そのような生活の中で，職場でのコミュニケーションに「きつさ」を感じたという。テレワークにおいては，オフィスという空間を共に過ごすのとは異なり，必要に応じて行われるオンライン・ミーティングにて他の社員と同期するのみである。それゆえ，「みんな出社してて周りに……人が座ってたら，これはこうだろうとか，誰に聞けばわかるとかがもっと早くわかったのに」と思いながら，新しい職場に「フィットするまでの時間が長い」ことが不快だったという。

この期間に妊娠・出産を経験した F さんもまた，あるはずだったつながりの機会の喪失による困難を経験している。F さんは，2020 年春に妊娠し，21 年初頭に出産をした。つまり，感染防止対策による生活時間・空間の変化と，妊娠・出産という自身のライフイベントによる変化が生じるタイミングが一致していた。それゆえ，その期間に友人らと会うことはできなかったものの，「どのみち赤ちゃんがいたら疎遠になるし」，「ある意味ラッキー」であったと語っている。

しかし，出産後の F さんは，他者との接触が制限されたことによる不利益を被っている。たとえば，平時では出産前後に参加できるはずの母親学級がオンラインで映像を見るだけになってしまい，不安を抱えることとなる。また，子どもが遊べる公共施設に「ふらっと遊びに行くことができな」い状況のため，近隣で子育てを行う人たちと交流することが困難なことへの不安を語っていた。

このように生活時間・空間の変化に由来する，コロナ禍がなければ同期していたはずの他者との非同期化は，仕事や育児といった実践上の困難として経験されている。他方で，そのように同期の機会が失われることは，他者との漠然とした心理的な隔たりとしても経験されている。C さんは，外出自粛要

請によって，他者と同じ場に身体的に居合わせる機会がほとんどなくなってしまったという。そして，「人と関わりなさすぎて人といるのがだめ」になり，「人がたくさんいるな……密だな」と感じてしまい，長時間電車に乗っていることが困難となり，途中下車してしまうようになったという[8)]。

以上のようなネガティブな経験が語られる一方で，コロナ禍でなければ経験できなかった，ポジティブな関係を得ることができたケースも語られている。居酒屋で店長を務めているBさんは，たびたび，休業や営業時間の短縮を経験していた。Bさんは，そのような状況に経済的な不安を抱いてはいたものの，営業時間が短くなることを喜んでいた。なぜなら，趣味であるゲームを友人とオンラインでプレイする時間を多くとれるようになったからである。居酒屋で働くBさんは，自宅で余暇を過ごす時間が友人たちとは異なっていた。しかし，休業や営業時間の短縮によって，周囲と同じ時を過ごすことができるように生活時間・空間が再編され，その結果，密なつながりが生じたのである。

同様に，Cさんも，コロナ禍がなければなかったはずのつながりを経験している。上述したように，Cさんは他者と対面で会う機会こそ減少していたものの，オンライン飲み会や電話を行う機会が増えたという。そうした状況において，ちょうど感染が流行し始めた時期に就職した友人とも関係を保つことができたという。これは，コロナ禍がなければ就職というライフイベントによって，Cさんとは同期しなくなるはずだった友人の生活の変化が抑制され，「時間も取りやす」くなったからだといえる。

このようなポジティブな変化は，同居する家族との関係についても語られている。コロナ禍当初，アパレル店に勤務していたDさんは，それまで帰宅が22時頃となっていたため，家族と夕飯をともに食べることはほとんどなかったという。しかし，緊急事態宣言の発出に伴う休業により，何年かぶりに一緒に夕飯を食べる機会を得られるなど，会話も増え，自身の好きなDVDを家族で見るなどして関係を深めることができたと語っている（cf. 永田 2021: 47–49）。

Eさんもまた，家族で過ごす時間が増えたことをポジティブに経験している。Eさんは，Fさんが「ある意味ラッキー」と語ったのと同様に，「子どもが生まれるとコロナじゃなくてもコロナっぽい感じになる」と語る。そして，「たまたま下の子が新生児のときに自粛期間になったので，ちょうどというか育児的にはプラスしかなかった」という。そして，パートナーとのあいだで「家族であってよかったね……独り身だったらしんどいね」といった会話がなされていたというように，そのような時間はコロナ禍を過ごす中で重要なものとなっていたのである[9)]。

5.2. リスクの決定者とその影響がもたらす変化

ここでは，その人との接触が感染の可能性を高めるような人とのあいだに生じるコンフリクトについて論じていく。まず，調査協力者自身が感染可能性の高いふるまいを行うことでわだかまりが生じたケースを見ていこう。Dさんは，コロナ禍が始まった当初，副業として繁華街の接待を伴う飲食店にも勤務していた。そして，ウイルスの蔓延が騒がれ始めてから「出勤しちゃった」際に，父から「めちゃくちゃ怒られて……病原菌扱いされた」という。Dさんは，まもなくして，「自分自身よりも家族にかかること」を心配し，その職を辞したという。このことは，一方的に不利益を被ってしまう側の抗議によって，そのコンフリクトが解消したことを意味している。

他方で，一方的に負の影響を被る側の抵抗感は次のように語られている。たとえば，公共の場で出会う，見知らぬ人たちに対しては，次のような態度が見られた。Eさんは飲食店や公衆浴場でマスクをせずに話している人たちに対して，「やめてくれ」，「本当に帰れ」と思っていたという[10)]。また，Aさん

は，通勤の際に「コロナはただの風邪」と訴える集団と出会う。そして，その集団が定期的に集会を開いていたことで，その街に「おかしくなってきたっていうイメージ」を抱いたという。

そのような自らを感染の危険に晒す者たちへの嫌悪感は，職場においても経験されていた。A さんの勤務先では，グループで「コンビニ飲み」を行っていた若い従業員のあいだで複数の感染者が出るといったことがあったという。それを受けて，年配の従業員は若い従業員を敵視するようになり，A さんとは「どこどこで飲み会やっているからあいつらには近づかないようにしよう」，「極力仕事以外の関わりでは近づかないようにしよう」などと話しあったという。

そして，ここまで述べてきた，感染する／している可能性の高い者を忌避する態度は，感染させる可能性が高い者とその影響を受ける者との出会いを未然に防ぐようにも作用し，それが他者と疎遠になることを導いている事例も見られた。父から叱責を受けた D さんは，その後は感染防止への意識を高め，友人付き合いに慎重になり，会う友人を選別していたという。すなわち，実際に感染を経験していた，「ホスト行ってたり水商売以上の仕事してたり，2020 年 2 月，3 月頃の意識」のまま「飲みとか行っちゃう人」とは，「嫌いじゃないけどデメリットが大きすぎ」るということで，会わなくなったという。それに対し，「気をつけるポイントが同じような子」，つまり，「同じような行動の取り方，根本的な考え方，気をつけレベルが同じような子」である，「コロナ前から毎月会っていたような親密な友達」とは引き続き交流を持っていたという。

また，離れて暮らす家族・親族との関係が疎遠なものとなってしまったことも，同様のメカニズムが働いていたといえる。たとえば，北陸地方に実家のある E さんは，子どもの姿を見せに行きたかったものの，実家には高齢の祖母がいること，そして，「石を投げられかねない」から「へたに帰ってくるなとくぎを刺された」ことを考慮し，帰省を断念しているという。同様に，B さんは，北関東にて，離婚した元妻とともに暮らす子どもに会うことが叶わなくなってしまったという [11)]。

5.3. 価値の異同による変化

以下では，ラッシュの議論と通ずるところがある，互いの「価値」の異同という観点から，人間関係における変化を検討する。まず，行為者の脅威との関係の取り方における差異に注目していく。たとえば，コロナ禍において問題となっていた「路上飲酒」についての語りを見てみよう。路上飲酒行為は飛沫感染のリスクを惹起するものとして，しばしば専門家システムやそれに関する報道などによって広く伝えられていた。この路上飲酒に対して，D さんは「見てくれが悪い。品がない。きれいにみえなくてやばい。そんなして飲みたいのか疑問」と述べていた。それに対して，E さんは「昼間公園で酒飲むのは別にいいかなと思う。そんなにガラ悪くないなとどこで見ても個人的には思っちゃう」と述べている。実際，E さんは自身もまた，人出の少なくなった夜の新宿歌舞伎町界隈を，気心の知れた友人とアルコールを飲みながら「散歩」を楽しむこともあったという。

このように，同じ感染拡大の可能性を孕む「路上飲酒」という行為であっても，D さんと E さんは異なる態度を示している。この時，D さんと E さんとの間で，「品」や「ガラ」の良し悪しという基準が，それぞれの「価値」によって測られ，リスク意識が嫌悪感や寛容さといった態度と結びつけられている。すなわち，それぞれの「価値」によって，当該行為に対する心理的な距離化が図られていると考えられるのである。

次に，「価値」の異なりや類似による人間関係の心理的な距離感への影響に注目しよう。前項で，D

さんが感染防止への意識を高め，友人付き合いに慎重になり，会う友人を選別せざるを得なくなった語りを見た。これは，一方では，リスクの決定者からの影響を忌避する態度として捉えられるが，他方で，「価値」の異同の現象としても説明されうる。その際，重要なのが，D さんがコロナ禍以降，親密な関係を続けていた友人について「気をつけるポイント」や「気をつけレベルが同じような子」と語っていたことである。

リスク意識が「価値」に基づいていることを直前で見たように，「気をつけレベル」とは自身の生活上の「価値」の追求において「望ましくない」帰結になりうるか否かを判断する分水嶺である。この「気をつけるレベル」が近い者同士では，「価値」の近しさによる関係の強まりがみられる。反対に，「気をつけるレベル」が異なる者同士では，「価値」の共有・維持はなされえず，関係が弱まっている[12)]。

このような「価値」の相違が生じてしまったことによる人間関係の距離化は，家族という親密な関係の間にも生じている。以下の E さんと F さんの語りは，家族における価値の相違がコロナ禍の出来事によって生じてしまった場面に関するものである。そこでは，家族に感染させないことをはじめとした，現在および未来において，安全に共同生活を営むことという生活上の「価値」の共有の綻びの露呈が語られている。

コロナ禍で出産を経験し親となった F さんは，副反応で「赤ちゃんのお世話」ができなくなるかもしれないという理由からワクチン接種を行うかどうか悩んでいた。そのような中，先に職場でワクチン接種を済ませたパートナーが「これで無敵だから飲めるぞってなっていた」ために，「いやちょっと待ってみたいな，赤ちゃんもいるんだからって話」をしなければならなくなっていた。また，先に「路上飲酒」について寛容さを示していた E さんであるが，「妻は人と結構ご飯食べたりしているので，秋口くらいそれを自分がちくちくいうようになってきていた。……久しぶりに友達とご飯っていうとうーんうーんうーんって相当苦い顔をしていたな」と述べていた[13)]。

E さんと F さんの場合では，ともに，「価値」の相違を話し合うことで埋めることができたが，こうした相違が決定的になってしまった例もある。それがコロナ禍で恋人との別れを経験した G さんである。G さんの恋人との別れは，E さんや F さんの場合のような，感染リスクへの危機意識の差によってではなく，コロナ禍をきっかけとした，パートナーとの互いの「価値」への共感の喪失＝「価値」相違の一形態によって引き起こされたケースである。G さんは同居していた恋人について，次のように語っている。

> 恋人が，一緒に住んでて，その人がめっちゃ働いてたのが，働けなくなっちゃって，仕事がコロナで，夜の仕事してたんで，働けなくなっちゃって。で，人間がめっちゃ変わっちゃったんですよ。……具体的にいうと，強くてかっこいい感じの女性で，そういうとこが好きだったんですけど，すごい変わっちゃって，それでお別れすることになっちゃったんですけど。

G さんのパートナーの変化は，コロナ禍で以前までの仕事を失い，「望ましい」生き方を見失った経験として捉えることができる。他方，芸人である G さんは，コロナ禍以前は毎日のように劇場に立ち，芸人としてトップになるために必要だと思われることに対してひたすら「直線的に努力」する生活を送っていた。「自分を高めるために」生きるという「価値」を持っていたと述べていた G さんにとって，「強くてかっこいい感じの女性」であったパートナーの生き方は響き合うものをもっていたと思われる。

しかしながら，そのような生き方をしていたＧさん自身も，芸人として舞台に立つ機会を失ってしまったことで，別の生き方を模索しなければならなくなったと語っている。Ｇさんは，当初は，自粛期間を休暇のように過ごしており，「それまでは休みもなく……自分を高めるために……やってきたのを解き放った時に，ああいいなあ」と「豊か」さを感じたことがあった。しかし，「［そのような豊かな生き方は］今からじゃ無理って。そのメンタルって。……意識してなっている時点でもう本物じゃないって。自分のアイデンティティみたいなものがすごい，揺らいじゃった」という。このようなＧさん自身の変化は，「自分自身もそうだし，形作られてるんだな，仕事というか昔の当たり前の環境に，人格とかも含めてだいぶ影響されてるんだなって思った」という語りからみてとれるように，Ｇさんのパートナーの変化にも重ね合わされている。

Ｇさんたちの経験は，生きる上での「当たり前」を構成している「存在論的安心」の喪失としてもまとめられるだろう（Giddens 1991=2005）。Ｇさんの場合は，これまで「当たり前」だった「自分を高めるためにこうやってやってた」生き方を，パートナーにおいては「強くてかっこいい感じ」の生き方を，それぞれ仕事を失うことで保てなくなってしまったのである。そして，新たな別様の生き方の「価値」の模索の試みが，Ｇさんの場合は，失敗に終わり，パートナーにおいても「違う仕事探さなくちゃいけなくなったときに」，かつてと「同じマインドをもてなくなっ」てしまっていた。

「強くてかっこいい感じの女性で，そういうとこが好きだったんですけど，すごい変わっちゃっ」たと語っていたように，ここで起きている価値の相違は，相手の価値への共感の喪失である。コロナ禍以前であれば，Ｇさんらは互いの生きる上での「望ましさ」への共感が相互になされていたが，仕事や環境の変化によって，そのような共感が喪失したことを契機に，分離を経験することになった。共感が喪失することで「価値」の共有が弱まり，親密な関係を終わらせざるを得なくなったのである。

6. 他者への心的な態度の変化に関する経験：災害ユートピア的な思いやり

6.1. 共感による思いやりの醸成

ここまで，コロナ禍における他者との接触頻度の変化について論じてきた。そこでの議論は，生活時間・空間に関するルーティンの変化や，感染症対策に伴うリスク，そして，価値に基づいたリスク意識の異同といったことが，ある他者との接触頻度の増減に関わるということを示してきた。

しかし，他者との関係といったときに問題となるのは，ここまで述べてきたように身体・物理的な出会いや離別だけではなく，心的な態度にも注目しなければならない。そこで，本節では，ここまでの議論を引き継ぎつつ，そのような側面に焦点を合わせていく。とりわけ注目するのが，災害ユートピア的な思いやりの態度である。災害ユートピアという概念の提唱者である，R. ソルニットは，コロナ禍にあっても，そう言いうるような多くの助け合いが見られたことを指摘している（Solnit 2020=2020）。

そのようなふるまいのきっかけとなりうる要因はいくつかあると考えられるが，ここでは，共感（empathy）に注目する（Solnit 2020=2020: 418）。共感は，他者の境遇に思いを馳せ，自らのそれとを重ね合わせることで，人々を利他的なふるまいへと導きうる態度だといえる（McCaffree 2020）。共感に関する研究においては，たとえば，共通の目標を持った関係において，あるいは，共通の社会的地位や人口学的な属性の類似性などといった，社会的な要因によって，共感が生じやすいと指摘されている（McCaffree 2020）。

このような知見を踏まえれば，コロナ禍における共感，そして，それに基づくであろう利他的な態度

の醸成は，感染症対策下での境遇や「価値」の類似性や異質性の影響を受けると考えられるだろう。以下では，本稿の分析視角であった，生活時間・空間に関するルーティン，感染リスク，そして，「価値」を軸に据えて，それらの異同が他者への共感的な心的な態度の変化に影響を与える過程を論じていく。まず，共感的な態度によって利他的なふるまいが醸成された事例を見ていく。ついで，他者の境遇に思いを馳せつつも，思いやりをもったふるまいにはいたらなかった事例を考察する。最後に，コロナ禍が長期化する中で，はじめは嫌悪感を抱いていた他者のふるまいに理解を示し，むしろ，その他者を思いやるような態度へと変容していった事例をそれぞれ考察していく。

6.2. 思いやりが達成された事例：B さんの経験

まず，共感による思いやりが達成された，B さんの経験を見ていこう。先に見たように，B さんは飲食店の店長を務めており，たびかさなる休業や時短営業を経験した。そうした中で，B さんは給料や雇用についての不安を抱きはじめる。そのような経済的な苦しみは，出勤できないことがただちに無給となってしまう，アルバイトの学生たちの方がより強く感じていた。B さんは，勤務時間が減ってしまった学生から「お金ないからご飯食わせてください」と言われたことがあったという。

このような状況にあって，B さんは「かわいそう」だからと，手をさしのべるようなふるまいをいくつか行っていたと語っている。たとえば，苦境を訴えてきた学生たちに対しては，店舗で食事を提供したり，廃棄になってしまうものを持ち帰らせてあげたりしていたという。

また，B さんの利他的なふるまいは，上述したような経済的な支援以外にも見られた。B さんは，コロナ禍を経ての働き方の変化を次のように語る。

> 従業員と喋ることは多くなりました。……コミュニケーションすごい多くなりました。楽しく働けるような，話すことを意識してる。顔を見て仕事できる機会が多くなった。イキイキと働けている。バイトの子も……［他のところでは］喋ることがないから，喋れて嬉しい，楽しい［と言っている］。

ここからは，「バイトの子」が「喋ることがない」という状況にあることへと思いが馳せられていること，そして，そのような状況へと手をさしのべようとしていることが見てとれる。

では，B さんがこのようなふるまいをとるにいたった心的な態度はどのようなものであったのだろうか。まず，B さんは，コロナ禍において，自身も経済的な不安を経験していた。そして，生活時間・空間の変化によって，他者と関わる機会も失っていた。それゆえ，同様の苦境を経験していた，アルバイトの学生たちと思いを重ね，それが思いやりをともなったふるまいへとつながったと考えられる[14)]。

6.3. 他者への共感が利他的態度につながらない事例：A さんの経験

上述した B さんの経験は，同様の苦境にあった人たちのあいだで，さまざまなメカニズムを通して，他者を思いやるふるまいが経験されているであろうことを示している。しかし，コロナ禍にあっては，自らに感染するかもしれない，感染拡大による不都合が生じるかもしれないといった合理的な計算，あるいは，そういった事態に対する「価値」の抱き方の相違によって，思いやりの醸成が妨げられてしまうこともあるだろう。

量販店に勤務する A さんの客への態度は，そのような事態が生じていたことを示唆している。A さんの勤務する店舗には，感染拡大防止のために複数人での来店を遠慮してもらいたい中にあっても，家族全員で「暇つぶし」目的で来店する人たちがいたという。「死人が出ているような中で……どうしても我慢できないわけじゃないのに」来店している，そのような人たちに対して，A さんは「なんかちょっとかなしい気持ちになりましたね，正直」と語っている。

A さんは，筆者らの「それは怒りではないのか」という旨の問いかけに対して，「なんで来んだよ，こいつらっていうのは正直やっぱ思ってはいましたけど」と一定の同意を示しつつも，「怒りとかじゃない」と応答している。そして，「こんな感じのタイミングでしか外出れないならかなしいな」と，自らの態度をあらためて述べている。

ここで，A さんが抱いている「かなしい気持ち」とは，どのようなものなのであろうか。A さんは，「自分も家族がいるからなのか」という筆者らの問いに，肯定的な応答を行っていた。このことは，家族全員で来店する人たちと自分の境遇を重ね合わせている可能性があることを示している。すなわち，家族間の生活時間・空間の同期が，コロナ禍による変化の上でしか成立しえないのかもしれないという事態に対して，共感的に立場を重ね合わせているのである。

とはいえ，その重ね合わせは，利他的な態度へとは向かっていないように見える。「死人が出ているような中で……どうしても我慢できないわけじゃないのに」，「なんで来んだよ，こいつら」という発言は，そういった行動をしている他者への非難と解することができる。つまり，感染拡大防止のために，外出の自粛を行うことへの「価値」の違いが，他者に肯定的な態度をとることを妨げているのである。

したがって，A さんは他者の境遇へと思いを馳せつつも，その他者が望ましくないことをしているということによって，手放しでそこに感情移入することができないでいたといえる。このことから，「かなしい気持ち」は両義的な態度を表現するものとして口にされたと考えられるだろう。それは，一方では，コロナ禍という状況にならなければ，家族全員で外出することができないのかもしれないということへの同情，他方では，それだからといって，外出をしてしまうことへの非難の双方がこめられた語りとなっているのである。

6.4. 他者への思いやりの萌芽：E さんの経験

A さんの経験においては，B さんの事例とは異なり，「価値」の不一致が，苦境への共感から他者へと手をさしのべることを妨げていた。それに対し，E さんの語りからは，そのような不一致が肯定的な態度へと変容していく過程を読みとることができる。E さんは，彼がコロナ禍において，他者に対してつめたい態度を抱いていたことを語っている。それは，たとえば，飲食店や公衆浴場において，会話の自粛を求められているにもかかわらず，自分のすぐ近くで会話をする人たちへの嫌悪感として現れていた。

そのような態度の背景には，「価値」の相違や感染という脅威に対して受動的にならざるをえない状況への不満があったと考えられる。彼は上述したような嫌悪感を抱く中で，自身が「マナーにうるさい」性格であると認識したという。つまり，彼は感染対策に専念すべきだという規範を内面化しており，それゆえに，その規範に従わない者たちを「マナー」を守れていないと非難しているのである。また，E さんは，公共の場でマスクをせずに会話をする人たちがいることに対して，「我が身に返ってくるから怖い」とも述べている。これは，自身の決定とは無関係なところで，感染が拡大することで，自

らが感染する，保育園が休園になる，病床が埋まり緊急時に診察してもらえなくなるといった不利益を被るかもしれないということへの恐れである。事実，E さんは保育園が 2 週間休園したことによる苦労を経験している。

しかし，E さんは，コロナ禍が長期化するにつれて，その感染がとりわけ自身の生活に影響を与えるであろう，保育園に勤める人たちの感染拡大を招くようなふるまいに対して，「人情」を抱くようになる。E さんは，「1 年とか半年とかで終わるんだったら我慢しなさいよあなた」と思っていたものの，1 年以上感染対策を強いられていること，「[たとえ感染したとしても] 子どもが死なないことがわかった」ことを受けて，「自粛しろっていうのは無理があるなっていうのは，人情的にも思うな」と語る。そして，保育士の方々を念頭に，「飲み歩いてもいいんじゃない」という態度を持つようになったという。

では，そのような態度の変化は具体的にどのようなものであろうか。E さんは，「人情」について，次のように語っている。彼は，まず，「20 代前後の何年間かでコミュ力が相当変わったりする人って少なくないので，……そこでなんか恋愛なり友達付き合いなりっていうのを封じられると人生が変に詰む」という意見を耳にし，それは「一理ある」と感じたという。それを受けて，「[飲み歩いた結果、] コロナ貰ってきて園に居づらくなって仕事変わるかもしれんけど，20 代の 2，3 年でするかもしれない恋愛と今の職場とっていったらたぶん前者の方が大事」であり，「仕事がとか責任がとか 20 歳前後なのにいう必要ないんじゃない，好きに生きれば」と思うようになったという。

もちろん，E さんは，実際に休園となってしまった 2 週間は「結構大変だった」から，休園ということになれば「相当程度困る」と考えている。しかし，「[その大変な 2 週間は自分の長い] 人生の中の 2 週間」に過ぎず，「毎日ちゃんと自分の子どもを預かっていただいている神様みたいな保育士の若い先生方に…その 20 代前半の青春を全て棒にしろっていうのを言う権利はちょっとないなって思うようになってきちゃっ」たというのである。

ここで，E さんが抱いている「人情」は，保育士たちとの，次のような類似性に基づく共感だと考えられる。この心境の変化を語るにあたり，E さんはたびたび「20 代」，「20 歳前後」，「若い」といったように，年齢に関する表現を口にしている。このように語るとき，E さんは保育士たちと自身の関係を，「飲み歩く」か否かを決定する保育士と，その影響を受動的に被るだけの保護者という関係ではなく，「20 代」と「30 代」といったように年齢によるカテゴリーによって捉えていると思われる。つまり，決定者と被影響者という分断した関係から，年齢といった連続性をもったカテゴリーを用いて，自他の関係を意味づけし直すことで，自他を同一平面上に位置づけているのである。

「30 代」である E さんは，自身も過去に通ってきたであろう「20 代前半の青春」や「20 代の 2，3 年でするかもしれない恋愛」を十分に行うことができず，そのような経験の不足によって「人生が変に詰む」かもしれないという保育士たちの境遇へと思いを馳せている。そして，そのような態度が，「保育士の若い先生方に…その 20 代前半の青春を全て棒にしろっていうのを言う権利はちょっとないな」といったように，他者の立場を思いやったふるまいをすることへとつながったのであろう。

このように E さんの語りからは，コロナ禍が長期化する中で，他者への態度が変容し，思いやりが醸成されたことが読みとれる。ただし，ここで注意しなければならないのは，保育士が「飲み歩く」自由を語る際に，感染した「子どもが死なないことがわかった」ことを「大前提」として挙げていたことである。つまり，保育士たちの決定によって被る可能性のある損害が子どもの死という重大なものではなく，「相当程度困る」ものの「人生の中の 2 週間」だけを耐えれば解決しうるものに過ぎないというこ

とが，他者の立場を思いやるきっかけとなったと考えられるのだ。

ここまで，本節では，コロナ禍において現れた他者への思いやりや，それにもとづく利他的なふるまいの可能性について論じてきた。B さんの経験は，困難をともにしているという立場の対称性が作用することで，利他的なふるまいが可能になった事例であろう。しかしながら，他者のふるまいが感染の拡大を招くという状況下にあっては，そのような態度が利他的なふるまいへと展開していくことには困難が伴うようだ。A さんは，家族揃って外出する人たちに対して，一定の理解を示しつつも，非難を向けてもいた。E さんは，それについて否定的な態度から，他者を思いやり，自由に「飲み歩く」ことへと共感を示す態度へと変容をとげていたものの，それはあくまで自身への被害が最小限のものにとどまるという条件が満たされた上でのものだったのである。

7. おわりに

本稿では，コロナ禍での対人関係に注目し，その変化に感染拡大防止対策が影響を与えるメカニズムをインタビュー調査で得られた語りをもとに論じてきた。「ステイホーム」による移動制限に伴う生活時間・空間の変化，感染のリスクが高いとされる群に属する他者との関わり方，そして，感染リスクへの価値的な態度の異同といった観点から分析を行った。その結果，これらの諸要因が，身体・物理的な接触頻度の変化や，共感に基づく利他的な態度の醸成（やその失敗）に影響を与えることを明らかにした。

感染を経験したわけでもなく，保健医療福祉の最前線にいたわけでもない人々の経験から得られた，このような知見は，コロナ禍を過ごす人々の「異なる景色」をより立体的なものとして描き出すものであろう（三浦ほか 2021）。とはいえ，本稿の調査対象者は極めて限定的なものである。したがって，より対象となる人々の範囲を広げ，その経験のありようを描いていくことが求められるだろう。

また，本稿では，上述した分析視角が，ギデンズ，ルーマン，ラッシュらのリスク論という，社会学理論と関連付けられることを示した。これにより，コロナ禍という特殊な状況で生じた現象を，他の災害発生時や平時に起きることと同一平面上に並置することが可能となった。このことは，前者の特徴をより明確にする，あるいは，それを通して後者の特徴を明らかにしていくことにつながるだろう。それに加えて，ギデンズがルーマンを，ラッシュがギデンズを批判しながら自らの立場を打ち出しているように，それぞれの議論はその差異が強調される傾向があるのに対して，コロナ禍という現象の分析を通して，各論者のアイデアを取り入れた，災害発生時の人々の経験を捉える，より包括性の高い枠組みの構築可能性を示すことができた。

さらに，理論的な展開としては，共感による助け合いの発生についての研究を進展させることが期待できる。6 節にて取り上げた共感については，経験的な研究が蓄積され，理論的な整備が進みつつある（McCaffree 2020）。そこで参照されている社会学の伝統的な理論の 1 つは，道徳に関する議論である。それに対し，本稿の議論は，共感論とリスク論を関係づけながらなされてきた。そして，ここでは触れることができなかったものの，ルーマンのリスク論では，本稿においては共感による連帯とみなしうるような，リスクの下での不安による連帯についての議論があり，そこでは、リスクや連帯が道徳と関連づけながら議論されている（Luhmann 2008=2015; 三上 2014）。したがって，本稿の議論は，道徳概念を軸に据えた，社会学的なリスク論と共感に関する理論を架橋する，あるいは，共感概念を中心に，リスクと道徳という問題を考察していくための端緒となるであろう。

注

1）「三密」の回避とは，2020 年 3 月から用いられ始めたスローガンで，感染防止のために「密閉」,「密集」,「密接」という 3 つの「密」を避けるよう促すものである。その概念の変遷については，田中重人が詳細な検討を行っている（田中 2021）。「ステイホーム」は，外出を自粛し自宅にとどまることを促す標語で，たとえば，小池百合子・東京都知事は，大型連休に当たる 2020 年 4 月 25 日から 5 月 6 日を「いのちを守る STAY HOME 週間」として，外出自粛を呼びかけている（東京都 2020c）。また，2020 年 4 月 7 日に発出された緊急事態宣言に伴い休業が要請された業種については，4 月 10 日の会見の資料にまとめられている（東京都 2020a）。

2）コロナ禍を受けて議論の対象となったものは，経済的な不安，非対面の仕組みが導入されたことでの働き方や教育の変化など多岐に渡っている（cf. 樋口・労働政策研究・研修機構編 2021; 中西編 2022）。

3）早川洋行は，コロナ禍が科学技術の発達の意図せざる結果とは言えないものの，ベックの「リスク社会」に近い状況が生じていると述べている（早川 2021）。牛膓政孝と小田中悠は，ベック，ギデンズ，ラッシュのリスク論を手がかりに，コロナ禍において人々が経験した自己の変容を考察している（牛膓・小田中 2022）。

4）「ソーシャル・ディスタンス」は，感染防止のために必要な他者との身体的距離を指す用語として広く用いられている。たとえば，小池百合子・東京都知事は 2020 年 4 月 6 日の会見で，約 2 m の「ソーシャル・ディスタンス」を確保するように呼びかけている（東京都 2020b）

5）ラッシュは，ギデンズ（やベック）のリスク論を「リスク社会」，自身のそれを「リスク文化」という語で区別している（Lash 2000: 50）。この対比におけるギデンズのリスク論とラッシュのリスク論の双方を踏まえ，日本におけるコロナ禍の社会を複合的に記述したものとして牛膓と小田中の研究がある（牛膓・小田中 2022）。

6）筆者らは同じ調査を基に，別稿を発表している（牛膓・小田中 2022）。そのため，本節の内容は，その論文と重複するところがある。

7）以上の条件に加え，テーマ上即時性が求められること，および，研究資源の制約を考慮し，筆者らが依頼しやすい方々の中から協力者を選定した。このようなサンプリングは，その信頼性や得られる情報の量に限界はあるものの，探索的な研究には有用であるとされている（Patton 2015: 309–10）。したがって，「小さな歴史」を集めていく土台を作るという本稿の目的にとっては十分な方法だとみなすことができる。

8）しかし，このような孤独の経験は，新たなつながりを生むことにつながっている。C さんは，一人で歩いている時間に，スマートフォンのアプリを用いたライブ配信を行い，視聴者と交流を持つことで，自身を中心としたコミュニティをオンライン上で築いていったという。

9）「ステイホーム」的な対策だけではなく，ワクチンの接種が家族のつながりを強めたケースもある。C さんは「この前ワクチンをうちに行ったんですけど……その時に久しぶりに家族でみんなで車に乗って，ドライブじゃないけど会場に行ったんでそれが楽しかったですね……今なんかみんなで話すことってあんまりなくて，時間帯がバラバラなんで……久しぶりにみんなで喋ったのが楽しかった」と語った。

10）本稿 6.4 節にてあらためて述べるように，E さんの嫌悪感は「マナー」を守っていないことを望ましくないとするような「価値」的な側面にも由来している。

11）その他にも，千葉県から都心部へ出勤していた A さんは，最初の緊急事態宣言が発出された前後には，近くに暮らす義理の親から，帰宅せずに都内に泊まるように「遠回しに言ってくる感じ」の扱いを受けていたという。

12）この変化の背景には，コロナ禍をきっかけとした D さん自身の「価値」の再帰的な変容があるだろう。そうでなければ，コロナ禍での脅威が未だ社会に浸透していなかった「2020 年 2 月，3 月頃の意識」のままで変容が生じていないとされた友人との分離が生じることはなかったと考えられるからである。

13）本稿 5.1 節で見たように，E さんはコロナ禍を家族と過ごすなかで「家族であってよかったね……独り身だったらしんどいね」という思いを強くしていた。ここでは，「路上飲酒」に示す寛容さにつながる E さん個人の「価値」よりも，家族という共同体の「価値」が前景化し，E さんとパートナーとがつつがなく共同生活を送り続ける上での「望ましさ」をめぐり，そこから逸脱しそうなパートナーとのコンフリクトが発生したと考えられる。また，E さんの「妻と，［互いに］独身だったら飲み歩いていたよねという話はする」という語りは，まさに家族の現在および未来のあり方における「望ましさ」という観点が，こうした場面で強く働いていたことの証左であると考えられる。

14）しかし，そのような立場の共通性や対称性のみが，B さんを導いたわけではないとも考えられる。B さんは，

食事をふるまった動機を語る中で，「かわいそう」と口にしたり，「従業員」や「バイトの子」といったように，「店長」としてのまなざしから捉えたりといったことをしている。ここからは，B さんが，従業員との関係を非対称的なものとしても捉えていることが読み取れる。このような非対称的な意味付けに基づいた思いやりは，「憐れみ」と呼ばれ，対称性に基づく「同情」とは区別されることがある（河野・三村 2015）。

謝辞

インタビュー調査に協力してくださった方々にお礼を申し上げます。

文献

有馬恵子，2021，「新型コロナウィルス感染症と地域コミュニティ：京都市出町桝形商店街における語りの分析から」『Core Ethics：コア・エシックス』17: 241–53.

朝日新聞，2020a，「人出 2～6 割減る　日曜日の主要都市，先週比　新型コロナ」，2020 年 4 月 14 日朝刊.

朝日新聞，2020b，「『夜の街』従業員向け，定期検査へ態勢整備　国と都が方針　新型コロナ」，2020 年 06 月 08 日朝刊.

Beck, U., 1986, *Risikogesellschaft*, Suhrkamp.（東簾・伊藤美登里訳，1998，『危険社会』法政大学出版局.）

Castel, R., 1991, “From Dangerousness to Risk,” G. Burchell et al. eds., *The Foucault Effect*, The University of Chicago Press, 281–98.

大門大朗・渥美公秀，2016，「災害ユートピアに関するダイナミックスについての一考察：『被災地のリレー』に着目した東日本大震災後の社会から」日本グループ・ダイナミックス学会第 63 回大会報告.

Foucault, M., 1984, *Historie de la sexualité 2: L’ usage des plaisirs*, Gallimard.（田村俶訳，1986，『性の歴史Ⅱ：快楽の活用』新潮社.）

Foucault, M., 2004, *Sécurité, territoire, population: Cours au Collège de France (1977–1978)*, Gallimard & Seuil.（高桑和巳訳，2007，『安全・領土・人口：コレージュ・ド・フランス講義　1977–1978 年度』筑摩書房.）

Giddens, A., 1984, *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press.（門田健一訳，2015，『社会の構成』勁草書房.）

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Polity Press.（秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳，2005，『モダニティと自己アイデンティティ：後期近代における自己と社会』筑摩書房.）

牛膓政孝・小田中悠，2022，「パンデミックと自己の変容：リスク／偶然性と再帰性」中西眞知子編『パンデミックとグローバル社会：もうひとつの社会への扉』 晃洋書房：141–75.

早川洋行，2021，「新型コロナ禍と社会学理論」『名古屋学院大学論集社会科学篇』58(1): 55–73.

樋口美雄・労働政策研究・研修機構編，2021，『コロナ禍における個人と企業の変容：働き方・生活・格差と支援策』慶應義塾大学出版会.

飯田渉，2020，「ロックダウンの下での『小さな歴史』」村上陽一郎編『コロナ後の世界を生きる：私たちの提言』岩波書店，70–9.

小松丈晃，2003，『リスク論のルーマン』勁草書房.

河野勝・三村憲弘，2015，「他者への支援を動機づける同情と憐れみ：サーベイ実験による道徳的直観の検証」『年報政治学』66 (1) : 61–89.

Lash, S., 1994, “Reflexivity and it’s Doubles,” *Reflexive Modernization*, Polity Press, 110–73.（松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳，1997，「再帰性とその分身」『再帰的近代化：近現代における政治，伝統，美的原理』而立書房，206–315.）

Lash, S., 2000, “Risk Culture,” B. Adam eds. *The Risk Society and Beyond*, Sage, 47–62.

Luhmann, N., 1991, *Soziologie des Riskos*, Walter de Gruyter.（小松丈晃訳，2014，『リスクの社会学』新泉社.）

Luhmann, N., 1996, *Protest: Systemtheorie und sozial Bewegungen,* Suhrkamp Verlag.（徳安彰訳，2013，『プロテスト：システム理論と社会運動』新泉社.）

Luhmann, N., 2008, *Die Moral der Gesellschaft*, Suhrkamp Verlag.（馬場靖雄訳，2015，『社会の道徳』勁草書房.）

Lip pop,2020，「コロナ離婚とは？原因と事例，対処法を徹底調査【100 人に聞きました】」（2022 年 5 月 28 日取得，

https://lipupo.com/covid-19divorce-problem).
McCaffree, K., 2020, "Towards an Integrative Sociological Theory of Empathy," *European Journal of Social Theory*, 23(4): 550–70.
三上剛史，2014,「リスク社会と理論的シンボリズムの隘路」『社会学研究』94: 29–54.
美馬達哉，2020,『感染社会：アフターコロナの生政治』人文書院.
三浦麻子，2021,「新型コロナ感染禍の当事者の声から社会現象を読み解く：さまざまな立場から見えた「異なる景色」をありのままに記録する」(2022 年 5 月 28 日取得，https://resou.osaka-u.ac.jp/ja/research/2021/20210323_2).
三浦麻子・村上靖彦・平井啓，2021,「異なる景色：新型コロナウイルス感染禍に際する感染経験者・医療従事者へのインタビュー記録」(2022 年 5 月 28 日取得，https://sites.google.com/view/hsp2020/InterviewTranscripts).
村上靖彦，2021,『ケアとは何か：看護・福祉で大事なこと』中央公論新社.
永田夏来，2021,「新型コロナウイルスパンデミックと家族：家庭内コミュニケーションにおける困難と可能性をめぐって」『マス・コミュニケーション研究』98: 41–50.
内閣府，2021,『男女共同参画白書 令和 3 年版』(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/index.html).
内閣府，2022,『孤独・孤立の実態把握に関する全国調査』(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kodoku_koritsu_taisaku/zittai_tyosa/zenkoku_tyosa.html).
中西眞知子編，2022,『パンデミックとグローバル社会：もうひとつの社会への扉』晃洋書房.
日本医師会，2021,「災害ユートピア」(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.med.or.jp/nichiionline/article/009945.html).
西迫大祐，2021,「生政治と予防接種」佐藤嘉幸・立木康介編『ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む』水声社.
重田園江，2003,『フーコーの穴：統計学と統治の現在』木鐸社.
Patton, M. Q., 2015, *Qualitative Research & Evaluation Methods 4th Edition*, Sage.
Pavel, K., E. Kajsa, F. Bohumil, 2020, "What about Time-Geography in the Post-Covid-19 Era?, " *Moravian Geographical Reports*, 28(4): 238–47.
Rose, N., [1989] 1999, *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self*, Free Association Books. (堀内進之介・神代健彦監訳，2016,『魂を統治する：私的な自己の形成』以文社.)
Rose, N., 2007, *The Politics of Life Itself*, Princeton University Press. (檜垣立哉監訳，2014,『生そのものの政治学：二十一世紀の生物医学，権力，主体性』法政大学出版局.)
佐幸信介，2021,『空間と統治の社会学：住宅・郊外・ステイホーム』青弓社.
Solnit, R., 2009, *A Paradise Built in Hell: The Extraordinary Communities That Arise in Disaster*, Viking Adult. (高月園子訳，2010,『災害ユートピア：なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房.)
Solnit, R., 2020, "The Way We Get through This is Together: the Rise of Mutual Aid under Coronavirus," *The Guardian*, May 14, 2020, (Retrieved May 29, 2022, https://www.theguardian.com/world/2020/may/14/mutual-aid-coronavirus-pandemic-rebecca-solnit). (渡辺由佳里訳，2020,「この危機を乗り切る方法は私たちが一体になること」『文藝』2020 秋号，417–26.)
田中重人，2021,「『3 密』概念の誕生と変遷：日本の COVID-19 対策とコミュニケーションの問題」『東北大学文学研究科研究年報』70: 140–116.
東京都，2020a,「小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 4 月 10 日）」(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/04/10.html).
東京都，2020b,「小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 4 月 6 日）」(2022 年 5 月 29 日取得，https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/04/06.html).
東京都，2020c,「小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 2 年 4 月 23 日）」(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2020/04/23.html).
東京都，2021,「小池知事「知事の部屋」／記者会見（令和 3 年 4 月 9 日）」(2022 年 5 月 28 日取得，https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/governor/governor/kishakaiken/2021/04/09_01.html).